

# バルザック『ユルシュル・ミルウエ』 の構造と意味

柏 木 隆 雄

はじめに

1842年の年頭に、バルザックはハンスカ夫人に宛てた手紙の一節で、次のように述べている。

「『二人の若妻の手記』 *Les Mémoires de deux jeunes mariées* は、出版されて実に大変な成功でありました。が、今年、最も素晴らしい作品は『ユルシュル・ミルウエ』 *Ursule Mirouët* です。」<sup>1)</sup>

その前年1841年8月25日から9月23日にかけて『ル・メサジェ』紙 *Le Messenger* に連載されたこの小説は<sup>2)</sup>、この年6月にスヴラン社から上梓されることになるから、上記の文面にバルザック一流の宣伝臭を感じないわけにはいかない。しかし、そのほか『ユルシュル・ミルウエ』に触れている手紙、たとえば、

「私に言わせれば、これは風俗を描いた傑作です。」<sup>3)</sup>

といった言葉を額面通り受けとれば、作者自身、真実自信満々の、見事な出来栄えと思われたらしい。

ところで、当時彼が筆を染め、あるいは脱稿し、あるいは稿を継いでいた主なものは、『二人の若妻の手記』、『暗黒事件』 *Ténébreuse Affaire*、『ラ・ラビニューズ』 *La Rabouilleuse* (第一部) などがあげられる。彼が『人間喜劇』の構想を、はっきり具体的に自覚して精力的にその完成にあたった1840年前後からの作品は、さすがに初期の作品群にまま見られる、荒削りな二級品は少なく、それぞれ水準以上のものである。が、それにしても、『ユルシュル・ミルウエ』は、同時期の作品の中で、作者自身の評価と愛着に値する、たとえば『ラ・ラビニューズ』に勝れる小説であろうか<sup>4)</sup>。

以下の小論が、その間に対する答に何らかの示唆を与えることができれば幸いである。

## I

『ユルシュル・ミルゥエ』の冒頭は、『地方生活情景』 *Scènes de la vie de province* の第一景にふさわしく、素朴で美しい小さな町の描写から書き起されている。

パリの方からヌムゥルに入ると、ロワン運河を通る。その両岸は、この美しい小さな町には、田舎風の城壁でもあり、絵画そのままの散歩道プロムナードともなっているのである。(p. 769)<sup>51</sup>

そして読者は、この牧歌的な、平和な光景のままに、次の行へ移ると、たちまちその光景がはらむ人間ドラマの中に入り込んでしまう。

1830年来、不幸なことに、この橋の向う側に沢山の家が建てられてしまった。この種の郊外がふえていくなら、町の表情は、いずれその優美な独特の良さを失ってしまうだろう。(p. 769)

ここに示したのは、はじめの四、五行をそのまま写したものにすぎない。しかし、この冒頭の数行は、小説『ユルシュル・ミルゥエ』の枠組みを、すでに示してはいないか。「1830年」という年を軸として、「沢山の家が建てられ」、「郊外がふえていく」ことに、新興ブルジョワジの繁栄の事実が暗示され、「田舎風の城壁」と「絵画そのままの散歩道プロムナード」のイメージが作り出す地方貴族階級の没落という明と暗がここに巧みに織り込まれているように思われる。そしてその予感、次の文で明確なものとなるだろう。

しかし、1829年には、街道の両側は、遮るものなどなかったから、かれこれ六十歳くらいの、背の高い、でっぷりした駅馬車の親方は、この橋の一番高い所に腰かけると、清々しい朝の大気に、その仕事で言わゆる尾巻きリボンをなす光景をすっかり見渡すことができた。(p. 770)

作者は、前述の光景に、一人のブルジョワを登場させることによって、小説の方向をさし示す。この男が魁偉で威圧的な外観であるだけ、それだけこの男

の存在は物語の展開の上に大きな意味を持つてであろう。

この駅馬車の親方、ミノレ・ルヴロォは、ヌムゥルのブルジョワのうちでも、一人の代表的な人物である。彼の来歴と家族については、やがて長々とこの町のブルジョワ四家、ミノレ、クレミエール、マサン、ルヴロォの *généalogie* が展開される、その中心となって語られる。本来 *généalogie* は貴族を語る時に必要なものであろう。しかしヌムゥルの貴族について、作者は、さしあたり次のように述べるにとどめている。

ヌムゥルには、あまり名の通っていない小貴族の三、四家があるばかりで、当時羽振りの良いのは、その中でポルトンデュエール家であった。町のブルジョワを寄せつけないこういう貴族の家は、近隣の地所とか、城のある貴族と往来していた。サン・ランジュの美しい土地を持つテグルモン家、抵当だらけの財産を、ブルジョワ達に狙われているルッブル侯爵家などが、そのめばしいものである。この町に住む貴族は、財産などなかった。(p. 781)

このあと、ブルジョワの系譜が『創世記』もどきに、その分岐興隆の様が語られる。それはブルジョワのすさまじい生命力とエネルギーを表わすごとくである。彼等は、今や代訴人とか公証人とかの地位を占め、そのうちの一人は町長をも勤める。そして「一方は、不動の諸制度に、一方は、労働の活発な忍耐と商業の狡智によって保護されてきた貴族、ブルジョワの二つの血統の対立が、1789年の革命をひき起し」、そのお蔭で駅馬車の主人ミノレ・ルヴロォは、「牧場や耕地及び森林などから、すでに三万フランの年金をあげている」町きっての旦那衆になりおおせていた。

開巻の平和な牧歌は、ミノレ・ルヴロォの登場と共に、疾駆する馬が宿場に駆け込んで来る埃さながらに、ブルジョワ達の喧騒へと移り、その空騒ぎは、もう一組の登場人物が舞台に現われることによって新しい局面を展開する。作者が「財産などない」町の貴族と、彼等の僅かばかりの土地財産を窺うブルジョワ達の間を送りこんだのは、ミノレ・ルヴロォの叔父であるミノレ博士<sup>6)</sup>と、彼の庶出の姪である美しい少女、ユルシュル・ミルゥエ<sup>7)</sup>である。

ミノレ博士が、パリで一旗上げるために町を出て医学を修め、ついには「自らも思い及ばなかった」立派な運命を切り拓いて、皇帝の待医をも勤め、「フランスの一番古い勲章で、いつでも貴族の爵位を授ける」サン・ミシエル勲章を佩くに至っている事実に、我々は注目すべきであろう。ミノレ博士は、生れはブルジョワに属しながら、その経歴、素養、交際は、貴族に伍しているのである<sup>8)</sup>。

彼がヌムールへの退隠と共に伴ってきたユルシュル・ミルゥエは、医者 of 舅である高名な楽器製造者にしてオルガン・クラヴサン奏者ヴァランタン・ミルゥエの私生児ジョゼフの娘である。ジョゼフは、その出生のためもあって、豊かな才能を持ちながら奔放な生活をし、諸国をわたり歩いたあげく、一介の隊付き軍楽士として終った。死に臨んで、義兄のミノレに託した赤子がユルシュルである。ユルシュルはほとんど生れながらに孤児であった。しかしその血筋から享けている音楽的天分と、養い親の教育とによって、ヌムールのブルジョワの娘達とは隔絶した、高雅な雰囲気をもつ少女に成長する<sup>9)</sup>。ミノレが、サント・ペラジの牢獄からサヴィニアン子爵を救い出してやったあと、彼に語る言葉は、ユルシュルという人物像を最も明確に現わしているだろう。

「もしあなたが、古い貴族の殻を脱ぎ捨ててしまったら、そんなものは今日もうはやらなくなっていますからな、三、四年、傍目もふらぬ、まじめな生活を送られれば、受けあって、すぐれた若い娘をあなたにさがしてあげますよ。美しく、愛らしい、信心に篤い、そのうえ七、八十万フランのお金持の娘をね。その娘は、あなたを幸せにするでしょうし、あなたもその娘を誇りに思うでしょう。ただその娘は、心情が貴族であるだけなのです。」(p. 877)

つまり、ミノレ博士とユルシュル・ミルゥエは、ブルジョワ階級に属しながら、彼等とは異種の世界に住み、かといって貴族の社会と対等というわけでもない、そういう中間的な層に位置しているのである。二人が、ヌムールの町の、その名も“ブルジョワ通り”の一角にある美しい邸宅に、ミノレ博士の遺産の獲得に疑心暗鬼するブルジョワ達との往来をつとめて避けながら、しか

も町の住民を見下して傲然と構える典型的な旧貴族ポルタンデュエール夫人の屋敷と向い合せに住うのは、その象徴的なことがらであろう。

ブルジョワ通りの博士とユルシュルの世界は、さらに次の人々が加わることによって、いっそうその特徴を示すことになる。ヌムゥルの司祭シャプロン、かつて士官学校の教官であり、余生を静かに暮すために、この町にひきこもった老軍人ジョルディ、それにかつての代訴人、現在の治安判事であるボングランの三人がその人々である。彼等はいずれも、「人生を掌にとるように知って」おり、世俗の関心よりは、もっと深い趣味と教養を求める点で一致し、博士を含めた四人ともに、孤児のユルシュルを、わが子さながらの愛情でいつくしむ。彼等の交りが、町のブルジョワ達と一線を画しているのは当然である<sup>10)</sup>。それはいわば、彼等だけの特別な世界を作りあげることにもなる。

こうして、ホイストやトリク・トラックの遊び相手である四人の老人は、博士がヌムゥルに住みつくようになって七、八ヶ月の後には、緊密な、余人を寄せつけない交際の場を作ってしまった。それは、そのいずれの人間にとっても、老いらくの友情といったもので、思い設けていなかっただけに、その甘美さは、それだけいっそう味わい深いものだった。(p. 798)

小説『ユルシュル・ミルゥエ』は、以上述べてきた、町の旧貴族、ブルジョワ、そして彼等の中間的な位置にあるミノレ博士のサロンという、三つの相対立する、少くともそれらの間で相互に心を許し合った交流がなされない世界を基本構造としている。むしろこの三つの世界が全く没交渉のうちに独立しているというわけではない。シャプロン司祭は、ポルタンデュエール夫人の許す唯一の相談相手であり、またミノレの相続人達と結託する公証人ディオニスの仕事仲間でもある治安判事ボングランは、斜陽貴族ルゥヴル侯爵の顧問の如き役割を果たしている。

この三つの世界は、老博士の愛する少女、遺産を心待ちにする相続人達には厭忌的となるユルシュルが、誇り高いポルタンデュエール家の一人息子サヴィニアンに恋するに至って、大きく揺れ動くことになるのだが、ところでそうした三つの世界の葛藤のドラマを通して見え隠れする、もう一つの世界がある

ことを見落してはなるまい。ヌムウルの町の民衆であり、農夫達である。

作者は、折あるごとに、それとなく「町の人々の意見によれば」とか、「ヌムウルの町中がミノレの相続のことにもちきっていたから、町の法律関係者の間でも、この問題が騒がれないでいなかった」などとふれて、大衆の存在を示し、その口さがない噂が、ドラマの進行に少なからぬ影を落していることを読者に知らせている<sup>11)</sup>。

「ありゃ、もうろくした馬鹿者さ、！」というのが、この土地の意見を要約していた。この小さな町の人々の下す見当違いの判断が、かえって相続人達の裏をかくことになったのだった。(p. 905)

この第四の世界の存在に触れた機会に、もう一人、この物語に重要な役割りを演じる人物について述べておかななくてはならない。公証人ディオニスの一等書記グッピルである。

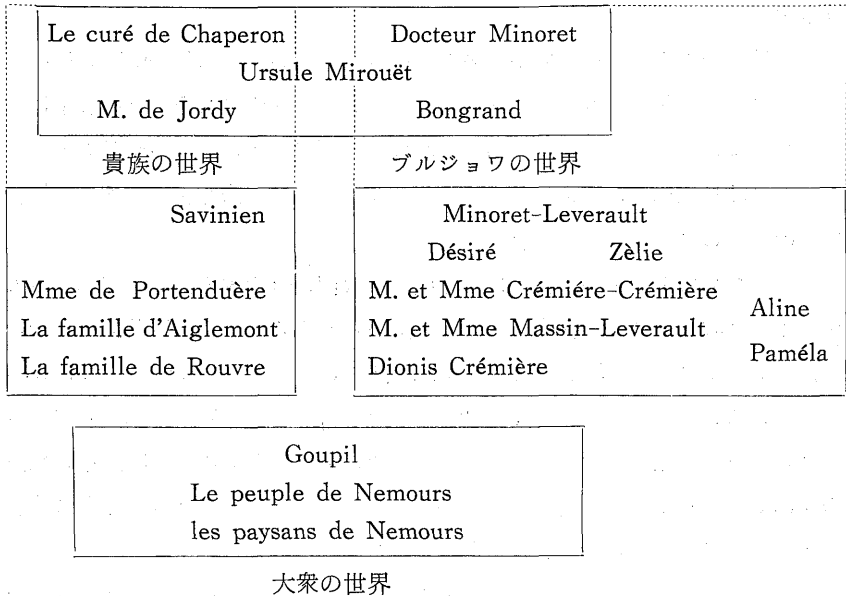
グッピルは農夫である父の金でパリで法律を修業し、放蕩のあげくヌムウルに舞い戻り、持ち前の陰険な鋭さで、ブルジョワ達に怖れられている男である。彼は、いわば第三の世界と第四の世界の中間にあつて、前者の世界の中核へ入り込もうと野心を燃やして狡智をつくす、王政復古期から七月革命へかけての「時代」の一面を体現する人格であろう。

以上述べてきたことを整理して小説『ユルシュル・ミルウエ』における、基本的な人間関係の構図を図式的に示せば、いちおう次頁のようなものとなるうか。

主要な人物を各小世界ごとに簡単にまとめてみただけのもののだが、物語の構図が具体的に把握されるように思われる。民衆の世界として他の世界と並置して示したものは、もし立体的に表現できれば、むしろ三つの世界の下部に重層した形で表わされるべきものである。

さて、『ユルシュル・ミルウエ』における主要な登場人物と、彼等の基本的構図の素描を終えた今、我々は、いよいよそのドラマの本来の内容に取りかからなくてはならない。

『ユルシュル・ミルゥエ』における人間関係



II

バルザックは、この小説で何を書こうとしたか。

彼は『ユルシュル・ミルゥエ』を二十日間で書きあげたと言うが<sup>12)</sup>、その構想はかなり以前からあったものであるらしい<sup>13)</sup>。この作品の破綻のない筋運びや、往々明瞭すぎるほどの伏線からもそのことは知られる<sup>14)</sup>。

「『私生活情景』 *Scènes de la vie privée* は、結婚に関する省察という点で秩序だてられていた。『地方生活情景』は、財産に関する省察という点で秩序だてられている。」とモーリス・アラン Maurice Allem は言うが<sup>15)</sup>、『ユルシュル・ミルゥエ』を貫く大きな柱が、莫大なミノレ博士の遺産をめぐるの、ブルジョワ達の狂騒であることは、異論のないところであろう。つまり先に示した図で言えば、ミノレ博士を中心とした世界と、ミノレ・ルヴロォを中心とする世界のかかわりである。正規の相続人であることを盾にとつての、彼

等の富、資本に対するあくなき執念は、時に戯画的な筆をもまじえて、克明に描き出されている。

この欲望むき出しの相続劇が、単なる肉親間の葛藤の *tragi-comédie* にならないのは、作者が、ユルシュル・ミルゥエという一人の少女を、その渦中に投じたからである。彼女はミノレ博士の義弟ジョゼフ・ミルゥエの娘であるが、ジョゼフは私生児なのであった。ここでバルザックは、法律書生であった経歴にものをいわせることになる<sup>16)</sup>。

フランス革命の「平等主義」は、「同一親等内の全相続人は、法律によって付与された財産を均等な割合で相続する」（1791年4月8日国民公会の布告）と定めて、私生児を嫡出子と同一視した<sup>17)</sup>。けれどもナポレオン Napoléon 1<sup>er</sup> の登場によって、民法典は「平等」の行き過ぎを訂正して、革命立法が与えた利益を私生児から剝奪する。我々は、その具体的な説明を、馱馬車の親方の家集った相続人達を前にして、公証人ディオニスやグッピル、さらに法学士になりたてのデジレの弁じる講釈から得ることができる。

ユルシュル・ミルゥエは老ミノレの相続人たり得るか。グッピルはこう説明する。

「ユルシュルは、ミノレ博士にとって赤の他人だよ。僕が法律を勉強していた1825年に出されたコルマールの控訴院の判決を覚えているが、それによれば、私生児が一旦死んでしまえば、その子孫達は、もう『介在』の当該者になることはできない、と宣告されている。で、ユルシュルの父親は死んでいるのだからね。」 (p. 843)

遺産獲得をめぐるあらゆる駆け引きや策略が、彼等の間で練られることになる。権利のないユルシュルにうまうまとさらわれてはならないのだ。老ミノレは、いかなる手段で法的にその相続を許されないユルシュルに財産を残そうとするのか、彼は、ついに友人の法律家ボングランにも打ち明けなかった。ミノレもまた、ディオニスやグッピルが考えたと同様の、あらゆる贈与の可能性を想定したあげく、無記名の国庫年金証書に貯蓄した財産を移しかえておくことで解決する。ところが、それを明記した遺言書は、ついにユルシュルの手に渡



らない。秘密を盗み聞いたミノレ・ルヴロォが博士の臨終のどさくさに、それを盗み出して燃やし、証書をひそかに自分のものにしてしまったからである。ユルシュルは、老博士の慎重な配慮も空しく、忠実な家政婦ラ・ブッジヴァルと着のみ着のまま、屋敷を追い出されてしまう。

こういう物語の進行に、民法典の不正義を見て、そこにそのような民法典の条項に作者が批判的であったとする考え方もあろう<sup>18)</sup>。しかし、それは今日の法律、道徳の常識から生れる見解であって、当時のバルザックが、私生児に関する考えにおいて、少くとも表向きは、必ずしも寛大であったとは思えない<sup>19)</sup>。もしそうであるとしたら、ユルシュル・ミルゥエをそれほど遠い関係にせず、ミノレ博士自身の私生児とするか、少なくとも実の兄弟姉妹の私生児に設定した方が、はるかにその目的に適うはずである。バルザックは、まだ作家的地位の確立してない若い時のものとはいえ、「長子権について」*Du droit d'ainesse* という政治的パンフレットを書いたこともあり<sup>20)</sup>、「私は、二つの永遠の光の下に筆を執るのである。即ち宗教と君主制という、同時代の諸事件がはっきりと宣告する二つの必要欠くべからざるもの、そしてそれこそすべて良識ある作家なら、わが国をその方向へと導くように努めるべきことなのである<sup>21)</sup>」と宣言する男なのである<sup>22)</sup>。実際、革命立法の徹底的な平等主義に立った民法規定は、貴族やカトリックの僧侶などの復権とともに、たちまち反動化していく。「社会にとって、私生児が認知されることは望ましくない」と民法典の編纂を命じた第一統領ナポレオンは指摘するのである<sup>23)</sup>。

『ユルシュル・ミルゥエ』における相続論議は、そうした歴史的な法律論争の過程をふまえた、いわば“ホット”な問題であるわけで、バルザックの小説家としての着眼がそこにある。ユルシュルは、父親はたしかに私生児であるが、彼女自身は両親の正式な結婚から生れた娘なのだ。作者の周到な計算を見逃してはならない。私生児の子であるという点で、彼女はハンディを負っている。が、正式な結婚から彼女は生れ、そしてすぐ両親に死に別れて、赤子のまま徳備わったミノレ博士や、その友人達の手で育てられるのである。つまり彼女は生れながら、その純粹無垢な魂が成長していくわけである。

被相続人であるミノレ老人に何らの愛情を抱かず、ただ遺産のみ貪ろうとする法律上正しい相続人と、心のつながりは誰よりも強いが法的になんらの権利を有しない養い娘とのドラマは、その娘が、上にのべた“二重性”を持つことによって一層興味深いものとなる。そのことが印象的に読者に示されるのは、ミノレ博士が死んだその日、治安判事が相続人達に責められて、屋敷のすべてのものに封印をしにやって来た時の場面である。

「ああ、あの方の相続人達は、何もかもすっかり取ってしまうがいいんです。」とユルシュルは激しい憤りのあまり、立ち上がって叫んだ。

「私は大切なものは、みんなここに持っているんですから。」といいながら、彼女は自分の胸を叩いて見せた。

「ええ？何を持っているって？」と駅馬車の親方は、マッサンと同様、おぞましい顔を出して尋ねた。

「あの方の徳行や、生きていらした時の思い出です。浄らかな魂の面影です。」と、彼女は眼を輝かせ、崇高な身振りで、一方の手をさし上げながら言った。(p. 920)

相続人達から「盗っ人娘」とも「私生児の娘」とも蔭口されてきたユルシュルの何という感動的な気高さであろう。一方「モンタルジィからエソヌヌにかけて『ミノレ爺さんは自分の身代の見当もつかない！』とされている」ミノレ・ルヴロォは、今しもユルシュルのために遺された財産を卑劣な手段で掠め盗り、その上になお、少女が「大切 précieux なもの」をしまっていると聞かすや、欲の権化そのままの顔を突き出す。当時のブルジョアジィのすさまじい富への渴望を見事に活写した場面であり<sup>24)</sup>、ユルシュルと相続人の著しいコントラストは、彼女が世俗の弱者であると同時に精神上的の勝利者であることを浮き彫りにするのである。

ユルシュルの生れながらに持つこの“二重性”が、物語に及ぼす意味は、ただにブルジョワ達の相続騒動に限らない。この小説のもう一つの柱であるユルシュルの恋にも、大きな影を落すのである。話を少し元に戻して、パリの mesmérisme を信奉する旧友の挑戦を受けて、Swedenborgiste の実験に立ち会

った無神論者のミノレに、その Swedenborgiste に繰られて夢中透視 somnabulisme を行う女が、ユルシュルの恋の芽生えを告げる場面を引いてみよう。

「ああ、お嬢さんはずいぶん恋をつのらせることでしょう。精いっぱい、純真に。あの方は浮ついた恋をするような人じゃありません。愛はお嬢さんの心を捉えて、奥深く入り込み、それ以外の感情など追い出してしまふほどです。」

「そんなこと、どこに見えるのかね？」

「お嬢さんの中にです。お嬢さんは恋の苦しみを知るのでしょ。そういう血を享けているんです。それはずいぶん苦しまれたのですから。」 (p. 830)

確かにユルシュルは恋をする。そして夢中透視の女の予言通り、その成就には、辛い試練を経験しなくてはならない。彼女のまことに純真で幼い恋の対象が、サヴィニアン・ド・ポルタンデュエールであったからである。先に示した構図で言えば、ユルシュル・ミルウエは、金銭に絶対的な価値を置くブルジョワ集団とは別に、血筋、家柄をもってその守るべき砦とする、旧来の貴族の世界に新たにかかわることになるわけだ。

問題は、彼女の恋するサヴィニ안의母、ポルタンデュエール夫人が、その着ている衣服そのままに、古い家柄と高すぎるまでの誇りとを生きがいとする、一徹なブルターニュ亡命貴族の未亡人であることにある。彼女の屋敷に、かつての日々そのままの姿で残されている故子爵の部屋の掛け時計が、過去の時間を示して永久にその針を止めてしまったように、夫人の精神もまた時代と共に進むことを頑固にやめてしまっているのである。

ミノレ・ルヴロォの遣り手の妻ゼリィでも、息子のデジレが「私生児の娘」と結婚しようか、などと冗談に言うのさえ頭ごなしに叱りつける。ユルシュルの恋を知ったミノレ博士が彼女に次のように論ずるのは当然であろう。

「もう彼のことは考えちゃいかんよ、可哀そうだがね、とんでもないことだよ。」と博士は重々しく言った。「ポルタンデュエール夫人はケルガル

エの出だもの、成程生計はやっと年三百フランくらいでも、決してサヴィニアン子爵の結婚は承知しはすまいよ。王国海軍中將、故ポルタンデュエール伯の孫甥で、海軍大佐ポルタンデュエール子爵の令息なのだ。その相手が、財産もない軍楽隊の士官の娘のユルシュル・ミルゥエ、その父親はねえ、今こそお前に言うが、私の義父である楽器造りの私生児なのだからねえ。」 (p. 859)

この思いもかけない、恐しい事実の暴露を、ユルシュルは健気な諦めの言葉で受けとめるのである。

「ああ、<sup>おとう</sup>教父さま、おっしゃるとおりです。私達はただ神様のみ前でだけ平等なのですわね。もうあの方のことを考えるのは、お祈りをしている時だけにいたします。」 (p. 859)

ユルシュルのこうした不平をもらさぬ謙虚すぎるほどの態度は、前に触れたミノレ博士の遺産処分をめぐる醜い騒動の際にユルシュルが見せる潔いそれと同じものである。

富を貶すことによって貴族の地位をもち上げ、ブルジョワジィからその力を取りあげようと尊大に構えるポルタンデュエール夫人は、したがって、ユルシュル・ミルゥエを間において、富の権力によってヌムルの町から貴族を追い払ってしまうと広言するミノレ・ルヴロォと、ちょうど奇妙なコントラストをなしていると言うことができる。馱馬車の親方は遺産の相続からユルシュルを締め出してしまおうが、ポルタンデュエール夫人は、身分、育ちの違いをたてに少女を自分の世界へ迎えることを拒むのである。

つまりこれは、『ユルシュル・ミルゥエ』に先立つ『私生活情景』の諸作品においてその基調をなしていた *mésaliance*、身分違いの結婚のパタンである。しかし『私生活情景』における *mésaliance* の多くは不幸な結末を迎えている。ところがこの物語では、主人公は夫人の同意を得られないで苦しい思いをするにはするが、それほど深刻なものを結果的には生じない。彼等の恋には何か光明が感じられるのである。それは一つには、恋の相手であるサヴィニアンが、母親の誇りとする貴族の名が、今や何の力も持っていないと言うことを身をも

って知らされていて<sup>25)</sup>、ユルシュルの中に本当の恋を見出した時には、彼はそうした古い家柄を誇る名門気質の殻から既に脱け出していたことにある。パリで見事に鼻柱を叩かれてヌムゥルに舞い戻る彼の頭は、まだ持参金つきの金持の娘を娶り、その財力と自分の家柄で政界にのし上ろうという野心を残していた。しかし純粋で可憐なユルシュルを知り、彼女の愛に応えるのはただ人間として完成していることだと悟り、彼は一介の見習い士官として初めからやり直す決意をする。この時、サヴィニアンは、ユルシュルの愛の世界に入る資格を得たと言えるのである。

彼等の恋が勝利を得るもう一つの、そして更に重要な理由は、ユルシュル自身が内包する、先に述べた“二重性”にある。まことに興味深いことだが、『私生活情景』に登場する男の主人公には、私生児であったり、あるいは姦通によって生れた不義の子が多い<sup>26)</sup>。私生児、不義の子という言葉は、『リア王』*King Lear*のエドマンドの台詞にもあるように、それ自身官能的な、退廃的な陰影を含むものである<sup>27)</sup>。しかし、その「私生児」から生れたユルシュルは、そういった官能的なイメージとは一切無縁な少女として描かれている。たとえばサヴィニアンが退役して、ヌムゥルに帰ってきた時にユルシュルが見せた恋の表現には、作者によって、意識的におよそ官能的なものとは縁のない彼女の“純潔性”が強調されている。

「でも、サヴィニアン、私達は一諸に暮せるようになるわね。」とユルシュルは彼の手を取り、辛抱しきれないようにその手を揺すりながら言った。

お互い顔を合せて、二度と別れ別れにならないこと、それが彼女にとっては愛のすべてだった。彼女はそれ以上のことは判らなかつたのだ。彼女の可愛い身振りや、ちょっと拗ねてみせる口調が、あまりにも無邪気なので、サヴィニアンも博士も胸が熱くなるのだった (p. 906)

『私生活情景』で *femme vertueuse* として描かれたヒロイン達の中にも見出されないような、極度の純粋性は、彼女が私生児の娘であるということがらと切り離しては考えられない。彼女は、「私生児」が持つ暗さを宿命的に持ち、そのアンチテーゼとしての、無邪気さ、未成熟さ、宗教性を付与されているの

である<sup>28)</sup>。

しかし、ユルシュルの特異な立場はミノレ博士の庇護があって安定しているのであって、彼の死と同時に、ブルジョワに対しても、貴族に対しても、たちまち弱い姿を露呈してしまう。博士の屋敷はミノレ・ルヴロォに買いとられ、ユルシュルはジョルディの遺してくれた僅かの金でつつしまやかに、町のはずれに住むことになる。サヴィニアンとの恋は、生れはおろか、財産もない彼女となってみればサヴィニアンの母親の許しを得る望みはなかった。その上、ミノレ・ルヴロォの走狗となったグッピルの奸計は、彼女を亡きものにすべく悪辣をきわめ、元来繊細なユルシュルの神経を苛んでいく。

横領された財産がいかにして本来の持ち主であるユルシュルの手に戻るか、かくも清纯可憐な少女の恋がいかにか頑迷な貴族を屈服させるか、というこの小説の二つの柱となる問題は、精神的打撃に疲労困憊したユルシュルが夢の中にミノレ博士を見ることによって解決される。博士は生前予告していた通り、苦しむ愛娘のために、横領者が誰であるか、その財産はいかにして隠されているか、そして最後には、やがて横領者の家に下されるであろう報いの鉄槌を告げるのである。

ユルシュルから亡霊の出現を打ち明けられた司祭とボングランの働きで財産はめでたく彼女に戻り、ユルシュルは晴れてサヴィニアンと結婚することができる。一方横領者のミノレ・ルヴロォは、一人息子のデジレを無惨な事故で失い、ミノレの尻を叩いていた妻のゼリィも、その打撃で狂死してしまう。

小説『ユルシュル・ミルウエ』を特徴づける最大のものは、この勧善懲悪を絵に画いたような筋立てと、それを完成させる *deus machina* としての亡霊の登場といったバルザック独特の神秘主義であろう。これらは、ブルジョワと地方小貴族の生態が歴史の流れの中で、かくもリアルに、個性的に描かれてきているだけに、読者は何とも奇妙な思いを禁ずることができない。もちろん、筋だけを追うならば、遺産相続の争いにしても、*mésalliance* にしても、結局は道徳的な面が強調されねばすまないことは明らかなだし、この小説が本来きわめて教訓的なものとして構想されたことは、作者がその姪の Sophie Surville

宛てた献辞に書かれてある<sup>29)</sup>。

お前達、若い娘というものは、迂闊なことを書けない公衆だ。なぜならお前達の魂が純粹であるように、お前達には、純粹な書物しか読ませてはならないのだから<sup>30)</sup>。

たしかに結婚前の子女へ読ませるものとしてみれば、ヒロインの余りに純粹すぎる造形も、人は心が淨く、理想的な教育を施されさえすれば、たとえ卑しい生れであっても、苦難を乗り越えて、必ず望み通りの輝やかな未来を持つことができる、という教訓を如実に示すものと納得できる。ユルシュルの明と暗との二面性も、その目的のためなら恰好のものであろうし、老ミノレには作者の、「父親」に対する理想化がある。

しかし、『ユルシュル・ミルウエ』を、単なる勸善懲惡の、婦女子用の読みものとのみ受けとってしまうのは、早計にすぎようし、バルザックもただそれだけでは、あれ程の自負も言明しなかつただろう。もちろん『私生活情景』の諸篇に見る一連の教訓臭に通ずるものは、すでに述べたようにユルシュルの恋を語る中にも見えるが、この小説の本来の興味は、もう少し別なところにあるのではないか。

亡霊の登場や透視術の女など、この物語の神秘主義的な要素を軸として検討してみたい。

### Ⅲ

『ユルシュル・ミルウエ』は『風俗研究』 *Etudes de mœurs* の中で、唯一つの超自然のことがらが語られる小説である。実際 *mesmérisme* に関する見解が相当の頁を割いて詳しく述べられ、それが物語の展開に意味を持つ役割も果しているのである。

バルザックが年少の頃から *mesmérisme* をはじめとして、神秘思想に深く心をひかれたことは、既に多くの研究家の指摘しているところであり<sup>31)</sup>、彼の書簡からも、*magnétisme* や *somnambulisme* の実験に関わった事実を見ることができる<sup>32)</sup>。Mesmerなどは Descartes や Newton と同列に証価してい

たとも言われている<sup>88)</sup>。「宗教に関する無関心と、催眠術の否定を支えに生きてきた」十八世紀流の唯物論者 ミノレ博士が、かつて mesmérisme の価値について論争しあった老友の招きを受けるやパリに飛び、旅宿で「すっかり若がえて眠れなかった」ほどの感動は、あるいはそのまま作者の、この場面を書いている状態であったかも知れない。それほどこの mesmérisme の証明を確認するミノレ博士の一夜の体験は、ヌムルの事件を描く筆とはまた別の力をこめて書かれているようにさえ思える。

この mesmérisme についての作者の関心と評価は、死んだミノレ博士が、ユルシュルの夢枕に立ち、隠された悪事を暴いてみせるという物語の展開に最も顕著にあらわれる。が、こうした神秘主義的な要素や超自然の現象を小説の鍵に使うことは、ましてその小説が、ブルジョワジィの生態を金銭欲という点で克明にえぐってみせる生々しい *réalité* を持つものであれば、かえって逆効果を多く生ずるように思われる。現にそれを致命的欠陥と見做す評者も多からう。超自然の要素と *réalisme* の平然たる同居はバルザックの本質でもあるわけだが、彼があえて *Nec deus intersit* の詩法を破った意味は何であろうか。

作者が大真面目で mesmérisme のマニフェストをこの作品で行っていることは否定できない。が、それを物語の展開の中において考えてみると、作者はむしろ、そうした神秘的要素を、意識的に大いに活用しているように思われてくる。

mesmérisme が重要な役割りを果たす場面を、今一度見直してみよう。まず眠りながら、ヌムルのミノレの家敷でのできごとを巨細にわたって告げる女のこと。次に彼女の透視に現われたことがすべて事実だと知り、神の声を聞いた心地がしてミノレ博士が回心すること、そして最後に亡霊の出現と、彼の予言の成就。以上の三点があげられようか。いずれもそのような超自然のことがらを信じない者には、荒唐無稽な作りごとと思われて大に興をそがれるものの、ちょうど唯物論者のミノレ博士が、嘲笑しつつも、*somnambule* の話にいつのまにか引き込まれて、問答してしまうように、読者もまたそのミノレと同じく、内心馬鹿馬鹿しく思いながら、実はわれ知らず物語の核心へ入ってしまってい



ることになるのである。

我々はユルシュルの恋の芽生えを、女が透視してミノレに見せた世界によってはじめて知ることには注意する必要がある。ユルシュルの恋は初心<sup>うご</sup>で純粹であり、先にも説いたように、その点こそ、この小説を成り立たせる重要なことだからなのであるが、やっと十五才の敬虔な少女の胸に灯る、彼女自身も気づかぬほどの恋心を読者に明らかにするのに、これほど自然で適切な語り口は他にあるまい。読者は mesmérisme や somnambulisme は信じないにせよ、少女の心のそこだけが、薄明るく照らし出される思いがするはずである。もしユルシュルとサヴィニアン<sup>サヴィニアン</sup>の恋のいきさつを、作者がいわゆる三人称で叙述するなり、二人の会話を用いたり、あるいはユルシュル自身の内的独白なり、心理解剖などをしてみせたりしたのでは、効果は半減したであろう。見えぬものを見る無意識の somnambule を使うことによってこそ、ユルシュルの恋の神聖は保証されるのである。バルザックは必ずしも mesmérisme の吹聴のみにこの挿話を書いてはいないのだ。

mesmérisme の確たる勝利を目のあたりにしたミノレが、靈魂の不滅や、幽霊の實在の証しをシャプロン神父に問うたり、ユルシュルに死後も亡霊となって現われてやると約束することにも、超自然を認める作者の信念を見るが、同時にそれは最後の結末への十分すぎる程の布石でもある。駅馬車の親方のひそかな犯罪もそれと無関係ではない。somniale はユルシュルの恋と同時に、博士が年金証書をパンデクト<sup>34)</sup>の中に隠していることを透視し、ミノレ親方はその証書を誰にも知られず奪うことになる。隠し金の存在は、作者が地の文でそれを明らかにするよりも、やはり作中の透視術の女が語るほうが、秘密性の色合いを一層濃くするであろう。そしてミノレの犯罪は、ますます彼だけの、妻さえあざかり知らぬこととなる。つまり、ミノレ・ルヴロォは、彼と、彼の信じない神とだけの中に秘密を作ったことになるのである。

読者は今やミノレ博士の出現に驚かないであろう。不当に迫害されるユルシュルと不当に財を殖やすミノレ・ルヴロォ、それを正しい、あるべき姿に戻すには、シャプロン司祭のいわゆる doigt de Dieu を必要とする。そしてそれは、

作中繰り返し述べられてきた超自然の实在、靈魂の不滅であり、mesmérrienを媒体として回心したミノレ博士が、まさしくその dogit de Dieu として登場したにすぎない。作者の ésotérisme と、彼の表看板たる catholicisme は、ここに見事に融合されてしまう。博士の亡靈の言を信じて、ユルシュルのためミノレ親方を説得するカトリックの司祭シャプロン Chaperon の名が、かつてバルザックが興味を抱いて問うたことのある magnétisme や somnambulisme の専門家、シャプラン博士 Dr. Chapelain<sup>85)</sup> の名前と暗合するのは、その ésotérisme と catholicisme の融合の関係を最もよく暗示することがらではないだろうか。

そうした神秘思想にも宗教にも全く無縁の者はいる。ミノレ親方の妻ゼリィがその代表的な人間である。亭主の告白を引き出したゼリィがシャプロン司祭に問いかける場面は、たしかにこの小説のポイントを示している。

「司祭さまは、死人が帰って来るって信じますか？」

「じゃあんたは、資金が入ってくるのは信じるのかね<sup>86)</sup>」と司祭は微笑みながらこう答えた。(P. 976)

非現実と現実、観念の世界と物欲の世界がシャプロンとゼリィの応酬を通して、いわば火花を散らすのが見える。「万事は金」と信ずるブルジョワの金への信仰が、超自然のことがらをも神のみ業と信ずる者達に打ち破られる図式がそこにある。そしてその金への信仰の無力を何よりも雄弁に証明するのは、ユルシュル・ミルウエの健気な、内気な愛なのである。ここで見落してはならないのは、司祭に体よくあしらわれたゼリィが、肝腎のユルシュルに毒づかずに、幽霊の話を取らまく人々のせいに帰することである。

「いけすかない連中だよ、あの人達はさ。私達からうまく巻きあげようって言うんだよ。あの年寄りの坊さんと、老いぼれの判事、それにサヴィニアンの子傭めが組んでいるんだな。あたいの掌に髪の毛が生えないように、夢枕なんてありっこないのさ」(P. 977)

幽霊がユルシュルの夢に三度現われたと、司祭はミノレ・ルヴロォに警告しているのだから、盗みを打ち明けられたゼリィがそのことを知らぬはずはないが、彼女はユルシュルを「幽霊話をでっちあげた連中」に算えていないのであ

る。ユルシュルの *fille privilégiée* であることはここにもあらわれている。

センツベリ G. Saintsbury はユルシュルを評して

彼女は成程素晴らしい、がどうも人間らしくない。

と書いている<sup>37)</sup>。これまで述べてきた彼女の属性の特殊性、彼女の物語における位置（第Ⅰ節で示した人間関係の構図を頭に置いてほしい）などを考えあわせると、このユルシュルの人間離れのした理想化こそ、この物語の最大のカギとなるように思われてくる。

既に説いた *mesmérisme* の効用は、ユルシュルの不思議に神秘的な清純さを強調し、物語にかえて「実在性」を帯びさせることではなかったか。ユルシュル・ミルウエの外的な特性は第Ⅱ節で検討した。彼女の内包する意味をこれから探ってみよう。そのためにはまずユルシュルを育てる人々について今一度考えてみる必要がある。

第一に注目されるのは、少女を教育した四人、ミノレ博士を始めとして、シャプロン司祭、ジョルディ大尉、そしてボングラン判事が揃って老人であることである<sup>38)</sup>。

老年は知恵と徳とを象徴する<sup>39)</sup>。幼女の薫陶にはふさわしいわけだが、その数が四人であることは何を意味するのであろう。ここで我々は、*quatre vertus cardinales*、いわゆる四美德を思い出さなければいけない。即ち慎重 *prudence*、節制 *tempérance*、堅忍、勇気 *fortitude*、そして正義 *justice* である。これらの徳はもちろん四人の老人がそれぞれ兼ね備えてはいるものの、たとえばミノレ博士が財産の保持その他に、親友にも打ち明けぬほどの慎重さ、シャプロン司祭が、無欲で質素な生活、ジョルディは軍人でもあり、大きな精神的苦悩を経た人間として描かれて、堅忍・勇気を示し、ボングランは、仕事の性質上、正義というように、各人がそれぞれの徳をとりわけて体現しているように考えられるのである。ミノレ、シャプロン、ボングランは、また医者、司祭、法官という、いわゆる「三つの黒服」階級に属して<sup>40)</sup>、そのことも看過してはならぬ重要な意味を持つし、それを指摘する解説者も多いが、それではジョルディ大尉がユルシュルの形成に占める大きさを考慮しないことになる。大

尉が彼女の成人を待たず小説の舞台から姿を消し、三人の「黒服」があとを引き受けるという展開には、社会の悪と悲惨の証人に見守られることによって現想的な教育がなされ、ヒロインが現想的な社会生活を営むことを予想させるが、しかし、四人一組の特別なグループを他のヌムウルの町人と隔絶して形成し、ユルシュルを囲むところに最大の意味があり、ユルシュルに付された生来の宗教性がますます強調されることになるのである。

ミノレ博士は少女を司祭に託す時、こう付け加えている。

「私は宗教的な感情が生まれつきあるものかどうか見たいのですよ。だから私はこの幼い魂が進んでいく方向を、助けも妨げもしなかったのです。」  
(P. 815)

ユルシュルのカトリック的成育の過程は、ここに記すまでもないが、ただ彼女を描くのにとりわけ感動的に筆が運ばれているところに注意しておきたい。まず透視術を行う女が明らかにする、ユルシュルの神への深い信仰がある。

「お嬢さんは、夕べのお祈りをしています。神様の加護を願い、邪しき悪念を自分の魂から遠ざけて下さるようにと頼んでいます。自分の気持を検討して、もしや神様の言いつけや教会の戒めに背きはしなかったかと、この一日の行いを思い返しているのです。」 (P. 833)

また、サヴィニアンのお祈りを受け取って、危くお祈りを忘れかけ、深く恥じ入る微笑ましい場面にも彼女の信仰が印象づけられる<sup>41)</sup>。

次に博士の死という不幸が襲っても、ユルシュルは絶望しないことである。司祭や判事に苦しい顔を見せず毅然と処する。時に不安になるサヴィニアンに彼女はこう言って元気づけて未来への希望を失わない。

「愛は辛抱なしにはうまくいきません。待ちましようよ。」 (P. 924)

相続人達はミノレの死後も彼女を敵視し、とりわけミノレ・ルヴロォ達は彼女を苦しめ、ついにはあやうく死に至らしめるところまでおいつめる。しかしユルシュルは彼等を憎まない。彼女がサヴィニアンとデジレの決闘をやめさせるのは、ゼリィの厚顔な頼みに屈したわけではないのだ。彼女の愛は、ミノレ親方への面当てに、その走狗となった自己の悪業を告白してきたグッピルにさ

え及ぶのである。

「あの方のために秘密を守ってやって下さいね。」と、ユルシュルは唇に指を持っていきながら言った。

グッピルにこの言葉が聞えた。ユルシュルのしぐさが目に入ると、彼は覚えず感動してしまった。(P. 953-P. 954)

以上のことがらに顕著なユルシュルの性格は、次の三つの言葉、「信仰、希望、愛」に要約できるのであろう。すなわちそれは、*la foi, l'espérance, la charité* の *trois vertus théologiques*、神に対する徳を表わすものではないか。先に指摘した老人四人の意味も、このユルシュルの徳と合わせて考えて見れば納得がいく。老人が人間としての基本徳を示すとすれば、ユルシュル自身は、より対神的な美德を持っているわけで、この七つの徳を外に内に備えている彼女が、いかにカトリック的世界を作り出しているか容易に理解できるだろう。

そのことは、彼女の容姿や服装ともかかわっている。彼女が美しい金髪で、その白い顔が映えるように、その衣服もまた白い服が多い。その最も典型的にあらわれている場面は、彼女が教会に行く時の様子をミノレ博士が思い浮べるところである。

博士は、教会に行く時のこの娘を心に思い浮べると、なぜかは知らず両の眼を涙で濡らすのだった。彼女は白縮みの服を着て、白いリボンのついた白絹子の短靴をはき、頭には、横の方に大きな結び目のある薄い布の細いバンドを巻いて、金髪は無数の渦巻を作って白く美しい肩に流れていた…  
… (P. 818)

白い色は勿論、清浄さ、無邪気さを示すものであろう。と同時にそれは髪の毛の金色と対になることによって、金、白二色が象徴する教皇権をも暗示して<sup>42)</sup>、彼女の住む宗教的雰囲気を生み出しているのである。

またユルシュルの住む部屋は、ミノレ博士の屋敷においても、彼の死後移り住んだ屋敷においても、「正確な整理ぶり」と、「秩序の精神、調和の感覚」が見られることが強調される。

以上あげたことがらのすべては、ヒロインの完璧なカトリック性となつがっ

ている。ユルシュル・ミルウエが私生児から生れた娘であるということも；法律論議よりもまず、そこに「原罪」の如き概念を認めることができるとするなら、彼女は、この物語において、センツベリの評にあるように、まさしく人間的存在を超えた、カトリック理念の一つの象徴的存在として、きわめて意識的、作為的に創造されたものということができる。

ミノレ博士の回心は、mesmérisme を契機とするものの、ユルシュルの清らかで無邪気な姿と声、即ち彼女のカトリック的存在に触れることによって行われたのであり、サヴィニアンとの恋にしても、ユルシュルとの邂逅がなければ、パリでの愚行やエミリィとの浮気な恋からも目ざめず、持参金つきの娘を求める野心家となっていたかも知れない。しかし、そうしたユルシュルの感化の最もドラマチックなものは、彼女と駅馬車の親方ミノレ・ルヴロォの関係であろう。ミノレ・ルヴロォは、物語の冒頭から、ユルシュルのアンタゴニストとして登場しているからである。

彼等は、肉体においても、精神においても、両極に位置している。ユルシュルがカトリック的理念を体現した、人間存在以上の性格として作者によって創造されたとした時、一方のミノレ・ルヴロォの、この物語の展開につれて描き出される変貌をよく注意して見れば、彼が、単なる敵役としてではなく、もっと重要な意味を負わされて創造されているのではないかと思えてくるのである。

冒頭、彼は「未だかつて神のことを考えたこともなければ、悪魔について考えたこともない」実際的な面のみの愚鈍な大男として登場する<sup>43)</sup>。他のブルジョワ達や大衆を形容するのに、作者は多く動物を引き合いに出し、とりわけ、抜けめのないマサンなどは常に猫にたとえられているが、ミノレ・ルヴロォは、その名にもかかわらず<sup>44)</sup>、小動物よりは「<sup>けもの</sup>獣のあらゆる条件をあわせて得られるカリバン」(P. 770)など、野獣、あるいは怪物、丸太、ぼろ布といった無生物のイメージで語られる。これは彼の愚鈍と狂暴を示すものだが、同時に、彼が神から最も遠いところにある存在であることをも暗示していると言えるだろう。ところが、この神を拒否しつづけてきた大男が、神と彼だけの秘密を持つようになる。つまり、先に指摘したように、遺言状を掠め取り、自から灰に

する行為がそれである。

全く独りきりでいられるように、妻の部屋に閉じ籠っていた親方は、躊躇せず、燐のマッチを探した。が、天のみ旨であるかのごとく、二本のつけ本は発火しようとせず、つづけさまに消えてしまった。三本目で火が点いた。彼は暖炉の中で、手紙も、遺書も焼いてしまった。(P. 917)

この場面は、小説の展開の上でも重要であるが、ミノレ・ルヴロォの人物像を考える上でも見落すことのできない個処である。マッチが二度とも消えて三度目に火が点くのは象徴的ではないか。三という数は宗教的に神聖な数字であり、この場面もたとえば、ペテロの三度のキリスト否認を思わせて、ちょうどミノレが実際に遺産を盗む時、両の耳に鐘の音を聞く場面と同様<sup>45)</sup>、神とミノレ・ルヴロォの運命的なつながりを示していると言えるだろう。彼がグッピルを使ってユルシュルを悩ませ、彼女を自分の目の届かぬ場所へ追いやろうとするのは、彼のあくまで神を拒否しようとする意識のあらわれであり、それにもかかわらず、彼が伯父の屋敷を買い取り、「ユルシュルから数歩離れただけの所に暮すような羽目」に落ちいるのは、神との見えざる絆の断ち難いことを示すものであろう。そして静かに運命を受け入れる少女の弾くピアノの音色は、彼には断罪の鐘の如く響くのである。ユルシュルへの迫害は、この断罪の鐘から逃れようとする彼の焦慮であり、それは当然彼の良心の苛責を伴っている。心身衰えたユルシュルはミノレ博士の亡霊を見るのであるが、ミノレ・ルヴロォもまた博士の亡霊を見ているのである。バルザックは巧妙にもミノレ博士の出現をただユルシュルの側からだけ描いて、駅馬車の親方がいかなる夢を見、どれほど懊悩しているかには触れない。ただ一行、次の個処でちらと示すだけである。亡霊の話をしに来た司祭に、彼はこう答える。

「一体全体、誰がそんな馬鹿話をでっちあげたんですかねえ？」と、彼は話が終ると、絞めつけられたような声で司祭に言った。

「死人自身だよ。」

この返事はミノレに軽い身震いをおこさせた。彼もまた博士を夢に見ていたのである。(P. 964)

ミノレ親方はヌムゥルの住人がいぶかるほどに焦悴し、やつれていく。そして彼に罪の償いを忠告に来た司祭に、ゼリィは、すっかり人が変わった亭主の終日岩の傍で考え込む姿を指し示すのである。

ミノレ・ルヴロォが、終日その傍らで考え悩むという岩は、おそらく彼の告白を拒む頑なな意志を象徴するのであろう。しかし同時に岩は、聖書などの故事から主の力か神の契約の強さを言い、とりわけ詩篇などにおいては、岩を神の宿りとし、またキリストを予示するという<sup>46)</sup>。ミノレが誰とも話さず岩の傍にいて、自分を落ち着かせるのは岩だけだと言う言葉には、岩の沈黙を求める気持と同時に自ら知らぬうちにも神を求める気持があらわれていると解釈し得るのではなからうか。

だが彼が神と真に近づくには、更に大きな犠牲を払わなければならない。彼は亡霊の予告の通り、一人息子を、そして妻を失ってしまうのである。厳しい神の罰であるわけだが、そのことによって彼は「かつてのミノレ博士の如く」町でも一番の神に篤い、慈善家となるのである。彼が失う妻と息子の名前に注意しよう。Zélie と Désiré はすなわち、ZeLe 熱狂、désir 欲望にそれぞれ通じる。二人を失うということは、彼がその二つの属性を失うことであり、それは真のキリスト教徒となるための不可欠のことからなのである。

彼の回心は、その外貌の変化によって象徴的に示される。

頭髪が白くなり、老衰して痩せた彼には、この地方の年寄り達にも、この物語の冒頭で、息子を待っていた時のような、幸福な愚か者の姿は全く見出せなかった。彼はもう以前と同じ様子で煙草をつまんだりせず、何かしら彼の肉体以上のものを持っているのだ。すべてに神の指が、彼を一つの恐ろしい例にするかのように、この男にのしかかっていることが感じられるのである<sup>47)</sup>。(P. 986)

ミノレ・ルヴロォの頭髪が白くなるのは興味深い。彼は、はじめ「灰色の、磨きをかけたような髪の毛」をしており、「深く凹んで二つの黒い茂みに覆われた灰色の眼」である<sup>48)</sup>が、「町一番の慈悲心に富み、敬虔な人間になる」と、ちょうどミノレ博士や、シャプロン神父がそうであったように、白髪となるの



である。この駅馬車の親方の、財産横領からついに一切の物欲を捨て、カトリックの帰依者となるまでの苦悩のドラマは、ユルシュルのそれと対比されて、強い感動をさえひき起すものである。

ところで、この二人の間に、ミノレの走狗となった、「ヌムウルのメフィストフェレス」グッピルを置けば、ミノレ・ルヴロォの回心のドラマの性格が一層明らかとなるだろう。グッピルこそは真の意味でユルシュルを苛んだ元凶であり、その醜い外貌と、陰険な狡智は、まさしく *diable* のそれである。彼はユルシュルをわが妻とする策略をたて、それが通じぬと知るや、彼女に精神的拷問を加えるが、この悪事が、ミノレ親方の遺書焚滅の持つ意味と異なるのは、それが、彼のみの秘密ではなく、他人を語らった、或る意味で大ぴらな、そして意識的に執拗な点にある。彼は自分の所業に倫理的反省を持たず、そのために深刻に苦しむということもない。ミノレが自分の思い通りの報酬を与えないと、たちまち彼の悪事をあばいてミノレをどん底へ突き落してから、平然と、彼の親戚のブルジョワ娘を娶り、ヌムウルの公証人の株まで買っておきまってしまうのである。彼はいわば神の埒外にある人間であり、その報いは、彼の息子達に現われはするが、グッピル自身は、「ヌムウルきっての才人」と町の尊敬まで受けるに至るのである。

このグッピルのはなはだ逆説的な栄達の結末は、かえってミノレ・ルヴロォの回心後の姿とコントラストをなして、そこに作者の意図もうかがわれるような気がする。徹底した物質主義者の妻ゼリィと、当世風の若者の典型デジレ、そして肉体的、社会的劣等感から陰険な悪事を目論むグッピルという三人にひきずり廻される愚鈍な大男ミノレ・ルヴロォは、ユルシュル・ミルウエというカトリックの観念の肉化したかの如き少女をめぐる、最も地上的な富の争いを通して、神なき人生から、神と共にある人生へと辿りついていくのである。バルザックの「これは、カトリックの小説だ」という言葉も<sup>49)</sup>、まさしくこの点において首肯されるのであり、物語が単に勧善懲悪に終り、清純な恋の成就が教訓として生かされているというためではない。まして、この物語に特徴的な、つまり致命的な欠陥ともされる超自然の要素は、実は補助的な役割しか果

していないと見るべきであろう<sup>50)</sup>。

#### IV

ユルシュル・ミルゥエの純粹さは、そのまま『地方生活情景』の第二景、『ウジェニ・グランデ』*Eugénie Grandet* に引きつがれる。あるいはむしろウジェニに至ってユルシュルの意味が一層明確になると言うべきか<sup>51)</sup>。バルザックの有名な「ユルシュルはウジェニ・グランデの幸せな従妹である」の言葉通り<sup>52)</sup>、彼女はウジェニから生れ出たヒロインと言える。

バルザックの小説が、多くアナロジヤやアンチテーゼから成り立っている事は、『人間喜劇』を系統的に読み始めればよく判るが<sup>53)</sup>、『ユルシュル・ミルゥエ』と『ウジェニ・グランデ』においても、その両ヒロインをはじめとして、彼女達に忠実なラ・ブジバルとナノンなど、殆ど同一と思われる類型的な人物像ができあがっている。サヴィニアンとデジレの二人を合せれば、シャルル・グランデができあがるし、ミノレ博士とミノレ・ルヴロォを合せれば、グランデ爺さんの一面を見ることができよう。

ユルシュルもウジェニも、その純粹、敬虔な性格において、まさしく「従姉妹」の間柄にあるが、唯一つ、愛がかかわる点で異っている。そしてその異なる点が、二つの小説の本質でもあると言えるのである。つまりウジェニ・グランデは、シャルルを知るに及んで、ユルシュルの恋とは違った形の、いわばこれまで素直に敬ってきた神が、そのままシャルルにすり変ったような愛し方をし、結局、その「愛の神」は虚像でしかなく、彼女は、かつて父親のグランデ爺さんがそうであったように、巨大な財産を守る Grande-Prêteresse de l'or となり果ててしまう<sup>54)</sup>。一方のユルシュルはひたすら神を信じ、希望を捨てずに暮らすことによって、地上の最も幸せな結婚を最後に勝ち得ることができるのである。

『ユルシュル・ミルゥエ』が『ウジェニ・グランデ』のアナロジヤとして生れたとすれば、『ラ・ラビューズ』は、『ユルシュル・ミルゥエ』のアンチ・テーゼとして生れたものと言えよう。この小説のヒロインである、フロラ

・ブラジエはユルシュルと同様、美しい孤児で、医者の方ルウジェ博士に育てられる。けれどもルウジェ博士にしても、フロラにしても、彼等が、ユルシュルとミノレ博士を全く裏返しにした設定であることは、一読して明瞭であろう。そのコントラストの最大に現われるのは、『ユルシュル・ミルウエ』が、正規の相続人に苦しめられる心正しい孤児の話であるのに対して、『ラ・ラビューズ』は、心正しい相続人母子が、狡智にたけた孤児である美女や、私生児に苦しめられるという点である。

『地方生活情景』におけるこれらの点を、上の作品のみならず、他の情景においても更に検討してみれば、バルザックの描こうとした『地方生活情景』の実像が浮びあがってくるはずだが、このことについては稿を改めて論じなければならない。

『ユルシュル・ミルウエ』において、バルザックは、彼の理想とする女性像を、ほぼ完璧なカトリック的精神を体現するユルシュル・ミルウエというヒロインを創造することによって描き得た。それは既に述べたように、小説の出来という点からは、作為的で御都合主義的な欠陥として見られる要素であることは否めない。しかし、いずれにしても作者は、その完全無欠なヒロインを、『地方生活情景』の冒頭におくことによって、ウジェニ・グランデ以下のヒロイン達の、いわば理想的な原型を示そうとしたと考えて良いように思われる。物欲が渦巻く世界に投げられた清純な少女の勝利を描いた物語は、やがて様々なヴァリエーションを見せて、一見平和にみえる地方風景の中でのドラマを展開していく。『ユルシュル・ミルウエ』は、そうした「情景」の第一景として、十分意義を果しうる作品であろう。

le 22 avril 1977

## NOTES

- 1) à Mme Hanska, 5 janv. 1842. Honoré de Balzac, *Lettres à Mme Hanska*, tome II, p. 36, Editions du Delta, 1968  
以下ハンスカ夫人に宛てた書簡を引用する場合は同書を用い、頁数は付さずに日付けのみを示すことにする。他の書簡については、やはり Pierrot 編の Garnier 版五巻本を使用し、これも同様に巻数、頁数を示さない。
- 2) cf. “En 1841, il ne réussit guère à placer que des nouvelles dans les grands journaux. Il figure encore, grâce à une *Ténébreuse affaire* et à *Ursule Mirouët* parmi les ‘maréchaux du feuilleton.”  
Michel Raimon, *Le roman depuis la Révolution*, p. 66, Armand Colin, 1967
- 3) à Mme Hanska, 1<sup>er</sup> mars 1842.
- 4) 目に触れた限りでの批評家の多く (Bardèche, Citron, Allem, Fargeaud 等) は、この間に対して否定的であるか、一般的な評を下すにとどまっている。ただ F. Lotte はバルザックと医学の関係を論じた論文で S. de Sacy と共にこの作品を買っている。F. Lotte, “La ‘médecine’ dans *Balzac*, *Le livre du centenaire*, p. 163-164, Flammarion 1952
- 5) Balzac, *La Comédie humaine*, tome III, nouvelle édition de la Pléiade sous la direction de P. G. Castex, Bibliothèque de la Pléiade. 1976 をテキストとした。*Ursule Mirouët* は Madeleine Fargeaud の校注で、現在最も良い édition と思われる。他に Bardèche 編 *L'Honnête homme* 版全集 (第二版) の第5巻及び Maurice Allem 編 Garnier 版 *Ursule Mirouët* 1952を参照した。後者と P. Citron 編 Seuil 版のテキストは、初出の時つけられていた21の章分けを復原し、小タイトルも付してあって、別に興味を引くところがある。  
以下、テキストの引用はすべて Pléiade 版により、ただ頁数のみを引用の後に付して、いちいち注記しない。
- 6) 従って博士も Minoret-Leverault の姓を持つわけだが、駅馬車の親方と紛らわしいので、医者であることからミノレ博士、或は、老ミノレと書いて区別しておく。
- 7) cf. “Quant à son nom, il pourrait être né du souvenir d'une Agathe *Ursule Minus*, veuve Tanchon, avec qui Balzac, comme imprimeur,

avait eu un procès en 1827” P. Citron, note de l'édition du Seuil, *La Comédie humaine*, tome II, p. 459.

Pléiade 版の Fargeaud の解説は更にその事実についてくわしく説いているが、Ursule Mirouët の名前については後に触れる。

- 8) サン・ミシエル勲章についての言葉は、ブルジョワとしてのミノレを見下そうとするポルタンデュエル夫人に対し、彼が貴族と対等であることを認めさせようと努力するサヴィニアン子爵の言葉である。(P. 886)
- 9) 彼女がブルジョワ達の面前でベートーヴェンを弾いてみせた時の、娘達やその母親達の無知な態度にそのことはよくあらわれている。なお、ユルシュルの音楽の才能や、この小説の舞台がヌムゥルであることから、ヌムゥルにゆかりのある音楽家の娘でしかもユルシュル同様ドイツ混血であったバルザックの“la Dilecta”, ベルニィ夫人を引き合いに出す研究者もある。
- 10) たとえばシャプロン司祭はポルタンデュエル夫人に「私は、ディオニスとかマサンとかルヴロとかいったこの土地の金持に、これっばかりの影響力も持っていないのです。」(P. 869)と語り、彼等との隔りを表明している。
- 11) バルザックのブルジョワに対する軽蔑はミノレ・ルヴロ以下 の相続人について叙述する様子にもうかがわれるが、民衆に対する嫌悪も『地方生活情景』の諸篇においてしばしば見出される。『ユルシュル・ミルウエ』においてたとえばシャプロン神父の親切が近在の百姓達にうまく利用される話や、マルセイがサヴィニアンに向って、高利貸しというのは民衆みたいなものだ と忠告するところなど、その好例であろう。
- 12) à Mme Hanska, le 30 septembre, 1841. “Au bout de 10 mois de travaux, écrire comme je viens le faire, *Ursule Mirouët* en 20 jours, est une de ces choses que ne croyent que les imprimeurs et les témoins de ce singulier tour de force, qui n'a que *César Birotteau* d'analogue.”
- 13) バルザックは、おそらく1834年以前に、遺産相続をめぐるっての人間喜劇を書く構想をもっていたと思われる。この頃に書かれたとされる『ボァルゥジュの相続人達』*Les Héritiers Boirouge* と題された小説の冒頭の断片がロヴァンジュール文庫 Collection Lovenjoul A19に残っていて、それは旧 Pléiade 版第10巻及び Club de l'Honnête homme 版第5巻の Appendix などに見ることができる。そのヒロインの名がすでにユルシュル・ミルウ

エである。ブルジョワ達の登場の叙述に、『ユルシュル・ミルウエ』のそれと同じ表現が見られるが、根本的には異種の小説と見なされる。しかし、いずれにしても、着想の出発は、そこにあったといえるだろう。

14) たとえば、冒頭のデジレの駅馬車が遅れて着く不安は、結末のデジレの悲惨な事故を予想させるし、ミノレ博士が繰り返しユルシュルに、死んでも、あの世から返ってくることを約束するところなど、作者の周到的な用意を感じさせる。

15) Maurice Allem, "Introduction" à *Ursule Mirouët*, éd. Garnier, p. 13

16) もっとも、このバルザックの法律的立論には、批判もあるようである。フェルジョオは、「ラ・モード」紙 *La Mode* 1841年10月28日の批評を引いている。

“Malheur à l'étudiant qui admettrait en force de chose jugée les étranges inductions que M. de Balzac tire des dispositions des codes, il risquerait fort de ne recueillir jamais que des boules noires, même à la faculté de Toulouse où ledit M. de Balzac semble avoir fait son droit” cité par Madelaine Fargeaud, dans 'Introduction' d' *Ursule Mirouët*, éd. de la Pléiade tome III, p. 736.

17) cf. ジャン・アンバール『フランス法制史』三井哲夫・管野一彦訳, p. 105, クセジュ文庫, 白水社。また稲本洋之助『近代相続法の研究』(岩波書店, 1968) 第二部第一章VIに詳しく論じられている。

18) このことについて、Marie--Henriette Faillie はその著書で次のように述べている。

“L'injustice du *Code* qui écarte de la succession les enfants naturels, loi qui joue un rôle si important dans le roman d' *Ursule Mirouët*, a été étudiée par Mlle Saint-Germès et encore plus longuement par M. Peytel. Or, ce qui nous importe n'est pas le bien-fondé de cette loi, mais la presque indifférence d'Ursule en apprenant du Dr. Minoret la condition civile irrégulière de son père.”

Marie-Henriette Faillie, *La femme et le code civile dans la Comédie humaine d'Honoré de Balzac*, p. 11-p. 12. Didier, 1968.

なお、著者が言及している Saint-Germès 及び Peytel の論については遺憾ながら未見である。

19) 1836年5月29日に Versailles で生れた Lionel-Richard Guidoboni-Visconti

は、Balzac と Guidoboni-Visconti 伯爵夫人との間の私生児だと信じられている。このことは確かにこの小説にも多少影を投げかけているかも知れない。彼の小説における「私生児」はなお詳しい検討を要する問題であろう。

- 20) *Œuvres complètes de Balzac, tome 21, Œuvres diverses, "Du droit d'ainesse"* p. 315-325. Club de l'Honnête homme, 2ème édition. 発表は1824年2月である。稲本洋之助は次のように述べている。  
「それは、売文的であるが故に、上層ブルジョアおよび新貴族層の要求をよく反映しているからである。バルザクは、さきの『意見書』が工業の発展に農業を従属させたのとことになって、土地所有により多く依拠する貴族層の立場から、産業ブルジョアジの支配力の増大を懸念している。」稲本洋之助, 前掲書 P. 347
- 21) Balzac, *Avant-propos*, in *La Comédie humaine* tome I, p. 13, éd. de la Pléiade. 1976.
- 22) 事実、バルザックはユルシュルに民法典 213 条の「夫は妻を保護し、妻は夫に服従する義務を負う」を忠実になぞるような発言をさせ、又、カトリックの戒めをきびしく守らせている。
- 23) ジャン・アンベール, 前掲書 P. 114
- 24) ミノレ博士の臨終の場面も迫力あるリアリズムを展開している。(P. 912-913)
- 25) サント・ペラジの牢獄から救われたサヴィニアンは、ミノレ博士に「博士、もう今日じゃ、<sup>ノーブルス</sup>貴族なんてないんです。あるのは<sup>アリストクラシイ</sup>特権階級だけですよ」(P.887) と叫んでいる。
- 26) たとえば Marie Gaston (*Mémoires de deux jeunes mariées*) Shiner (*La Bourse*), Oscar Husson (*Un début dans la vie*), Alvert Savarus (*Albert Savarus*), などがあげられる。このことについては拙稿「*Scènes de la vie privée* の世界」待兼山論叢第 8 号 P.17 以下に触れてある。
- 27) エドモンド 自然よ、あなたは僕の女神です。  
あなたの法則だけは僕は守っています。… (略)  
なぜ世間じゃわれわれに焼印をおすのだ、下賤だとか、下卑ているとか、脇腹だとか。解せん、解せん。われわれこそは、人目を忍ぶ野性の楽しみの中で出来た子なのでひとときわよく親たちの血がまじり、猛烈な精力をつぐ……  
「リア王」一幕 2 場 (斎藤勇訳)

28) 作中、彼女はしばしば天使にたとえられるのである。

29) cf. à Mme Hanska, le 9 avril 1842.

“*Ursule Mirouët* est dédiée à ma nièce Sophie, qu’il faut marier dans quelques temps.”

この手紙にも結婚前の女性への教訓の意図がくみとれる。

30) Dédicace à Sophie Surville, août, 1841, *La Comédie humaine*, tome III, p. 769 éd. de la Pléiade, 1976.

バルザックはこの献辞のはじめに「まだ世間というもの知らぬ一人の娘から承認を得た」と書いている。それについて Marie-Henriette Faillie は、次のように書いている。

“S’agirait-il d’Anna Hanska, et Balzac aurait-il voulu enfin décrire l’éducation idéale selon lui?”

Marie-Henriette Faillie, *op. cit.*, p. 31.

31) たとえば Lovenjoul が引いている同時代の証言を例としてあげておく。

“J’en citerai un exemple entre mille. Balzac alors s’était épris du magnétisme avec ce fol enthousiasme qu’il apportait à toutes choses nouvelles. Son zèle était ardent, sa foi entière, son assurance imperturbable. Il suivait les exercices des magnétiseurs, étudiait leurs poses et dévorait leurs livres.”

cité in Spoelberch de Lovenjoul, *Histoire des œuvres de H. de Balzac*, p. 378, Slatkine reprints, 1968.

32) au Dr. Chapelain, vers le 14 avril 1832.

“Monsieur, l’impuissance du somnambulisme m’attire. (...) Notre science est intéressée à cela.”

à Mme Carraud, le 27 septembre, 1833.

“Hé quoi! vous souffrez! Songez bien à moi, au magnétisme, qui n’est pas illusion.”

33) P.G.Castex, “Nous nous apercevons en effet, à la lecture de ses *Notes philosophiques*, que, vers cette date, il plaçait le discutabile Mesmer au même rang que Descartes et Newton, parmi les théoriciens du cosmos,…” *Le conte fantastique en France*, p. 172-173, José Corti, 1951.

34) *pandectes* は即ち、ユスティニアヌス法典であって、この本の頁の間にユル



シュル宛ての年金を隠すのは、遺産相続をめぐる法律論議をふまえているとも考えられる。

35) 注32) 参照

“Dr. Chapelain—Magnétiseur auquel Balzac eut plusieurs fois recours pour des expériences avec une somnambule.  
note de Pierrot in *Correspondance de Balzac*, tom I, p. 753. éd. Garnier.

36) 原文では次のように書かれている。

—Croyez-vous aux revenants? dit Zélie au curé.

—Croyez-vous aux révenus? repondit le prêtre en souriant.

やむを得ず本文のように訳してみた。

37) George Saintsbury, introduction of *Ursule Mirouët*, translated by Clara Bell, Every man's Library, 1947, p. v

39) cf. Jean Chevalier et Alain Cheerbrant, *Dictionnaire des symboles*, Seghers, 1974 *vielle* の項参照。

40) この三つの階級が『人間喜劇』でもつ意味はたしかに大きい。 *Le colonel Chabert* 中の Derville の言葉を引いておく。

“Savez-vous, mon cher, reprit Derville après une pause, qu'il existe dans notre société trois hommes, le Prêtre, le Médecin, et l'Homme de justice, qui ne peuvent pas estimer le monde? Ils ont des robes noires, peut-être parce qu'ils portent le deuil de toutes les vertus, de toutes les illusions.”

*La Comédie humaine*, tome III, p. 373. nouvelle édition de la Pléiade, 1976. 拙稿「*Scènes de la vie privée* の世界」P. 21-P. 22 に少し触れてある。

41) 彼女が教父に初めてパリに連れられても、芝居見物などに出ようとしなないのは、サヴィニアン会いたさからであるが同時に社会の戒律を厳しく守っているからでもある。

42) cf. “Et il est amusant de remarquer que Grandet porte sur sa tête le blanc et l'or, couleurs de la papauté.”

note de l'article *Thèmes religieux dans “Eugénie Grandet”* par Princeton University, in *L'Année balzacienne* 1976, p. 212. éd. Garnier.

43) ミノレ親方の宗教に対する態度は、ある意味で十八世紀流唯物論者のミノ

- レ博士と共通しているのが興味あることがらである。尤も、ミノレ博士は、神の存在を信じないのであって、ミノレ・ルヴロォは、神そのものについて考えることさえしないのではあるが。
- 44) Leverault は Lièvre (野兎)に通じるのである。このことはユルシュル Ursule が Ursus (熊)に通ずるのと考えあわせると、その逆説的な組み合わせに興味をひかれる。なお、先にひいた *Dictionnaire des symboles* によれば伝説上、「熊」は「野兎」と対立して考えられるという。
- 45) 回心前のミノレ博士も、遠くの方で鳴る鐘の音を耳にする場面がある。(P. 818)
- 46) “Dans l’Ancien Testament, le rocher est symbole de la force de Yahbé, de la solidité de son Alliance, de sa fidélité. Les Psalmistes dans leur détresse invoquent Dieu comme un rocher. Moïse apparaît aussi comme l’homme du rocher, d’où il fait jaillir les eaux vives d’un coup de sa Baguette. Ce rocher préfigure le Christ.”  
Jean Chevalier et Alain Gheerbrant, *Dictionnaire des symboles*, “Rocher”, Seghers, 1974.
- 47) そのすぐ前でミノレ・ルヴロォは、雷を受けて白くなった樅の古木にたとえられているが、樅の木は、神性をあらわす木である。  
“CHENE Arbre sacré dans de nombreuses traditions, le chêne est investi des privilèges de la divinité suprême du Ciel, sans doute parce qu’il attire la foudre et qu’il symbolise la majesté.”  
*ibid.*
- 48) J.P. Richard は、その著 *Etudes sur le romantisme*, 1970, 所収の *corps et décors balzacien*s という論考でバルザックの小説にあらわれる肉体的特徴の意味を探っているが、同書 P.30 で、ミノレの外貌にふれて、その表現が不安な精神を象徴するものと論じている。
- 49) à Mme Hanska, le 12 juillet 1842.  
“Je crois que vous serez heureuse de lire *Ursule Mirouët*, et si l’abbé J (acottin) est avec vous, il vous dira que c’est l’ouvrage d’un catholique.”
- 50) François Mauriac は、次のように述べている。  
“Ce qui m’est cher dans *Séraphita*, dans *Ursule Mirouët* et dans *La Peau de Chagrin* elle-même, ce n’est pas un ésotérisme mais une

métaphysique et cette métaphysique m'apparaît d'autant plus é-  
mouvante qu'elle s'enracine plus profondément dans le physique.”  
cité par André Allemand, dans *Unité et Structure de l'univers balzacien.*,  
Plon, 1965.

- 51) cf. P.G.Castex, “Balzac n’a certainement pas fait voisiner au hasard  
*Eugénie Grandet* et *Ursule Mirouët*, ces titres symétriques et même  
assonancés annoncent des romans qu’il a lui-même rapprochés.”  
*L’Univers de “La Comédie humaine”*, dans *la Comédie humaine* de  
l’édition de la Pléiade, 1976, tome I , p. XL III.
- 52) à Mme Hanska, le 16 octobre, 1842.
- 53) 拙稿「*Scènes de la vie privée* の世界」参照
- 54) Princeton University, *op. cit.*, p. 228. in *L’Année balzacienne* 1976.

## Résumé

### La structure et la signification de l'univers d'*Ursule Mirouët*

Takao Kashiwagi

Balzac se vante d'avoir écrit *Ursule Mirouët*, *chef-d'œuvre de la peinture des mœurs* selon lui. Mais ce roman est moins apprécié par les critiques d'aujourd'hui que l'auteur lui-même ne le croyait. Est-il vraiment si peu digne d'intérêt pour les lecteurs de nos jours? C'est ce que nous allons voir dans ce petit article.

L'intrigue de cette histoire est assez simple: La succession des fortunes du Dr. Minoret et l'amour de sa filleule Ursule Mirouët. Ces deux choses posent des problèmes parce qu'Ursule est la fille d'un enfant naturel. Elle n'est donc pas héritière légitime et n'est pas digne d'épouser le fils de la vieille noblesse de Nemours. De sa naissance, elle a le désavantage, mais son cœur est noble et angélique. En lisant de plus près ce roman qui nous apparaît d'abord avoir simplement un but moralisateur, nous y apercevons la création de la fille idéale d'après l'auteur: la jeune fille obéissante, pieuse, très bien élevée. Dans ce but, Balzac se sert bien des éléments surnaturels, surtout le mesmérisme auquel il s'intéresse depuis sa jeunesse (c'est sur ce point que la critique attaque l'auteur).

Nous éclaircirons le rôle important qu'ils jouent dans ce récit après la démonstration de ce que symbolisent les quatre vieux hommes qui élèvent Ursule. Et l'analyse du caractère de l'héroïne et de celui de Minoret-Leverault, spoliateur de l'argent destiné à Ursule nous dévoile la vraie signification de ce roman: l'univers allégorique où se rencontrent la croyance en Dieu et la croyance à l'argent.

Nous y trouvons sans difficulté l'analogie entre *Ursule Mirouët* et *Eugénie Grandet* ou *la Rabouilleuse*. Ce roman placé à la première des *Scènes de la vie de province* annonce bien les autres.